第2章 伝承のチカラ―

地域の昔話に目を向けてみよう―
そこには、先人が生きてきた証しがある。
チャレンジ学校づくり支援事業では、
地域の教育力を生かし、地域への理解を深める学習を展開。
地域に残された話は、
現代に生きる私たちに、たくさんのことを教えてくれる―。

写真_1　上田宗箇ゆかりの地「岩船の水」や、「お手形の池」で、児童に話をする八木康さん。実際にその場所を訪れることで、児童の興味も増す。児童から八木さんへ質問も多く出された。

写真_2　「岩船の水」に触れる児童。茶人であり、武人でもあった上田宗箇が浅原に隠せいした際、茶を点てるのに使用した銘水。今も変わらず清らかな水が枯れることなく湧き出ている。写真_3　真剣なまなざしで八木さんの話を聞く児童。

地域へのまなざし

地域の教育力を生かし、地域への理解を深める「チャレンジ学校づくり支援事業」が市内の小規模小学校で行われている。

これは、小規模校同士の交流を通じて、普段は体験できない同世代の子どもたちとのさまざまな体験活動や、地域の人や伝統文化とふれあい、豊かな人間性や社会性を育むというものだ。

また、自分の住んでいる地域や、交流相手校のある地域に誇りと愛着を持つことができるのもこの事業の特徴。現在、原小学校と玖島小学校、金剛寺小学校と浅原小学校、吉和小学校と宮島小学校の間で行われている。

この事業には、地域の支援者の力によるところが大きく、民泊や地域行事の体験など地域の方の支えなくては成り立たない。

9月5日・6日に浅原で行われた、浅原小学校（新見忠昭校長）と金剛寺小学校（市川洋校長）の同事業。浅原小3・4年生4人と、金剛寺小4年生19人が、地元の方の説明に熱心に耳を傾けた。

伝え残すということ

浅原で「そうかさん・そうかさあ」と呼ばれ、親しまれてきた上田宗箇ゆかりの「岩船の水」付近では、地元浅原在住で郷土歴史研究家の八木康さんが児童に解説した。

「地域に伝わっているお話は、その地域の誇りです。私たちには、地元に残された話を次代に伝え残す義務があります」と、八木さんは強調する。

金剛寺小4年の中小城太一くんは、「そうかさんのことは知りませんでした。昔の人がいろんな事をして暮らしているのが分かりました」と話してくれた。

勘兵衛の化け猫退治

それは、むかしむかしのお話―。

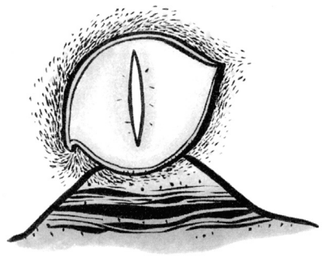
大野の中山というところに、中村勘兵衛という弓の名人がおりました。

中村勘兵衛は、大野の門山城主（今の城山）大野弾正と親交があり、いつも中山から城へ矢文を射て、音信を通じるほどの相当の腕の持ち主だったようです。

ある日、勘兵衛は猟から帰ると、その日使った矢を庭先で乾かしていました。

すると、赤猫がどこからともなくやってきて、しきりにその矢を数え始めました。

勘兵衛は不思議なことをするものだと思って見ていました。



次の日、勘兵衛が猟から帰ってくると、向いの更地の山に目の光る化け物のような不思議な生き物がいるのが見えました。

とっさに弓を構えた勘兵衛は、狙いを定めて射ました。

ところが、確かに手応えがあったのに、光る目は消えるどころか弱まりもしません。

次の矢も、次の矢も同じでした。

そして、とうとう12本の矢をすべて射つくしてしまいました。

そこで、いつもは使わない「隠し矢」を1本取り出して射たところ、ついにその光は消えました。

勘兵衛が更地の山に行ってみると、前の日の赤猫がその片方の目に矢を射られて死んでおり、その横には12枚のやかんのふたが落ちていました。

猫は、12本の矢をそれで防いでいましたが、13本目の隠し矢のことは知らなかったのでしょう。

資料提供／㈱鯉城協同

各地に残る化け猫退治の昔話

勘兵衛の化け猫退治の話は、大野地域では中山の昔話として語り継がれている。しかし、この話は全国にいろいろな形で伝えられてもいる。

吉和地域に伝わる話では、一貫にもなる大猫が化けるという話が残っている。猟師は鉄砲を持ち、家で玉を焼いて作るところを猫が見ている。猟師が山で大きな目玉に出会い、鉄砲を打つがカチンとはじかれる。全弾撃ちつくすが、すべてカチンとはじかれ、ついに隠し玉で大きな目玉は倒れた。次の日その場所へ行ってみると飼っている猫が死んでおり、その横には鉄瓶のふたがあった。それで猟師は隠し玉を持っているという話だ。

弓と鉄砲が違うだけで、大野地域で語り継がれている話と同じ内容である。

これらの話は、旅人や商人が、旅の宿で泊まったときや仕事の合間などに、互いの古里の話をしたり、聞いたりして広まったと考えられ、同じ話が違う地方の話として生まれ変わったりする場合もある。遠く離れた場所なのに、同じような昔話が残っているのはこのせいだともいわれている。